

日中韓

実心実学を
築いた99人

日本東アジア実学研究会会長・東京大学名誉教授——小川晴久
中国実学研究会会長・中国人民大学——張踐
韓国実学学会前会長・高麗大学——金彦鍾

編

思想家 ハンドブック

勉誠出版

卷頭言

本書は、東アジア三国の十七世紀から十九世紀中頃までの、日本の言い方であれば近世の実学思想家九十九人（各国から平等に三十三人）を選んで紹介するハンドブックである。本書は、三国の実学研究会（一九九一〜三年頃ほぼ同時に発足）の共同作業として、四半世紀の交流の成果として、三カ国でほぼ同時に刊行される。どうしてこのような本が誕生することになったのか、その意味はどこにあるのかを、簡潔に記して、読者のご理解を得たい。

先ず実学思想家とは何かであるが、東アジア三国の近代以前に、儒学が実学と呼ばれていたことを念頭に置いていただきたい。ここに選ばれた九十九人が皆儒学者であるとは言えないが、当時、東アジアの近世に大きな影響力を持っていた思想が儒学であるので、選ばれた九十九人、書名にいう実学思想家とは、儒学的素養を根底に持っていた思想家と解していただきたい。ただ東アジア三国の実学研究会の実学理解の差によって、各国が選び出した三十三人の中には、いわゆる思想家とは言えない、技術や日用の学で貢献した学者もいる。しかし近現代ではなく、近世の思想家が主題である。今日の日本で実学と言えば、実用の学であり、技術（テクニク）の学である。これは近代以後の実学である。近代以前の儒学をバックボーンにした実学は、近現代の実学が失った実心（自然への畏敬、真

実への愛、自己修養などを大事に持っていた実学、実心実学である。(日本の部の私の序文を参照されたい)。ここに選ばれた九十九人は、近世の思想家である以上、皆実心実学者と言ってよい。日本語版の書名の副題でそれを明示した。

東アジア三国が自国の近世の思想家を実学思想家と名づけて研究してきた歴史はそれぞれ違う。その中で歴史が最も長く、しかも国を挙げて研究してきたのは、隣国の朝鮮・韓国である。少なくとも一〇〇年の歴史がある。日本は源了圓先生の研究以後とすれば、六十年、中国は四十年弱(一九八〇年代の改革開放以後)である。東アジア三国の実学研究の交流は、この実績(差)を反映して、一九九〇年五月に韓国の成均館大学大東文化研究院が開催した「東アジア三国における実学思想の展開」という国際シンポジウムに中国と日本の研究者が招かれて始まった。中国の代表が今後隔年に順繰りにこのようなシンポジウムを持つと提案し、今日まで十二回開催されてきた(三か国の実学研究会で最も組織が小さく、財政基盤のない日本での開催は辛かった。最近では中国も経済力がつき、飛行機代は各自自弁で開催できるようになったので、辛さは減じている)。

一昨年の第十二回は日本の国際基督教大学のアジア文化研究所で開催されたが、大会報告集を刊行する勉強出版の岡田社長から、近世の実学思想家とは何かと問われて、三国の実学研究会の代表が急遽集まり、岡田社長も交えて協議し、各国三十三人ずつ選び、九十九人の実学思想家ハンドブックを次回大会までに作ることにした。三十三人ずつという平等性が何よりも良いが、一〇〇人に一人欠けるその一人は読者であるというアイデアも中々いい。読者のあなたが一〇〇人目となって、九十九

人を束ねて一〇〇人にして欲しい。日本の読者としては、朝鮮・韓国の思想家の多くが未知ではないだろうか。東アジア三国の読者にとつて、他の二国の思想家を知る良いチャンスである。この啓蒙性は大きいと思う。三十三人ずつと言う平等性が生きてくる。

このハンドブックは二十五年間の交流の成果である。それぞれの国の研究史の違いがあるため、近世の実学理解では統一が取れているとは言えない。しかし近世の実学思想家を媒介にした三国の学術・思想の交流はとても意味がある。ここに選ばれた九十九人が魅力ある、尊敬に値する人々であるからだ。数の制約からここに選ばれなかった人々を含め、近世の実学思想家（実心実学者）の先達たちから大いに学んで行こう。現代が抱える課題の解決や、三国間の相互理解の促進のために、本書は大きな役割を果たしてくれるものと確信したい。あなたが一〇〇人目となって本書を愛読し、活用してほしい。実心実学とは何かを考え、それを現代に構築するためにも。三国の相互理解のためにも。

二〇一五年 秋

小川晴久